我国上代の鋳造技法についての考察

1．伝向粟崎出土銅鐸の出土の可能性

2．上代惣型鋳造技法考察

南部勝之進

はじめに

本学から日本海方面を望むと，小立野台地の谷間から，市街地の深紫の瓦の家並が続き，やがて家並の点在がつきるあたり，細長く横に延びて河北潟が光る。白い潟の向側には緑の丘陵が，そしてその背後に日本海の濃いコバルトが大空に接し水平線となる。

この緑の丘陵が河北郡内灘村である。内灘村は河北潟に寄りそい，背後に日本海の荒波のざわめきを聞く丘陵の上の魚村である。その大部分は砂地であり，ねむの林が続く農業の不適地として，地引網などによって生活の資を得ていた貧しい村であったと云えよう。

この内灘村から銅鐸が出土したと伝えられている。いつの頃だれが見付けたのか，その状況はつまびらかでないが，伝内灘村向粟崎出土の銅鐸は実在している。

この銅鐸については，石川県郷土資料館の吉岡康暢氏がくわしく石川考古学学誌に発表せられている。

それによると，この銅鐸を所蔵していたのは，粟崎の豪商木谷家であり，その存在が世に知られたのは明治期であるが，昭和2年梅原末治博士が「銅鐸の研究」の中に銅鐸出土地の日本海側に於ける東限として学会に発表，公認されたものである。

木谷家は藩政時代から豪商として代々活躍した家で，金石の銭屋と共に，日本海側の廻船問屋として栄えた。北海道・下関・大阪を結ぶ北前船を動かしていたことから，銅鐸も，木谷家が他国から購入して所蔵していたことも考え得ることを吉岡氏は指摘せられている。

この銅鐸は木谷家の没落と共に一時所在が不明になったこともあるが，現在金沢市寺町の鐸甚ホテルの経営者である鍔氏の所蔵品である。吉岡氏は内灘村に出土する可能性についても附近の遺跡，出土品から考え得ることを述べられている。この研究報告は細部に亘って完璧と考えられるので，今更私が考察を加える余地もない様であるが，私は出土の可能性があるとする立場から考察を加えてみたい。

銅鐸については，古来多くの学者によって，研究が行なわれ，その成果の発表があるにかかわらず今日なを，謎の多い鋳造品とされている。

この謎には，考古学，歴史学などの学者によって，それぞれの専門分野の立場から解明しようとされているし，鋳造専門の作家，技術者によっても，古代の鋳造技術を解明する立場から，当時の最も優れた製品である銅鐸の鋳造技法についての研究が発表されている。私も同じ立場から，鋳造技法として最も古い技法である惣型鋳造法をどの様に活用されて，銅鐸が造られたかについて考えみたい。

然し技法を述べる前に，銅鐸そのものについて，私達の故郷から出土した銅鐸を通じて簡単に述べる。

1．弥生文化の中での銅鐸

弥生文化の中で，銅鐸の占める位置は極めて重要であることは多言を要しない。私達の郷土の古代史に於いても同様で，石川県から銅鐸が実際に出土したか，否かは，郷土の古代史の解明に於いて重要な手掛りとなる。

ここで銅鐸文化の背景について簡単に述べる。弥生文化とは紀元前3世期から紀元3世期に到る約600年間を云うのであるが，縄文文化が弥生文化に変ったのは，稲作農耕と金属の使用を知ったことが中心になった変革であるとされている。これらの技術が大陸から北九州の小国家群に伝えら

れた。稲作農耕については，初期には愛知県，中期に関東地方，中期後半には東北地方にまで，東に向って急速に普及した。

金属技術の普及は稲作と違い遅々としており，弥生中期に北九州から，瀬戸内海沿岸までとされている。これは日本に於いて金属の産出がなく、輸入以外に金属材料の入手方法が無かった為であろう。

北九州に於ける金属の利用は，主として，利器であり，(銅剣・銅矛・銅戈）など瀬戸内海沿岸に於いては，利器の外に銅鐸が造られた。利器や，青銅鏡が舶載品として知られたのは弥生前期末とされているので，比較的短期間に製造技術を知り，銅鐸の如き困難な鋳造品を造り得るほどに発達したことになる。

もっとも弥生期に於ける利器の製造は実用的なものから，直ぐに象徴的，儀礼的なものに変っている。これは鉄器及鉄材がほとんど同時に舶載され，加工技術も知るようになったからであろう。鉄材も，農耕具・工具・武器・狩猟具などに次第に取り入れられ，古墳時代を迎えて飛躍的に発達する過度期であった。

弥生期は，利器を中心とした北九州圏，銅鐸を中心とした畿内圏，石器時代がその儘残った東北圏に分けられている。

利器や青銅鏡が初期に舶載されたころは，部族の長の宝として，権威の象徴として用いられた。例えば青銅鏡の如く，光り，反射し，映すと云うものに対しては恐怖すら感じたことであろう。これらも国産される頃になると共同体の祭器として用いられた。銅鐸の製造は始めからこの目的のために造られたものである。

永い縄文文化から弥生文化を創り上げた人達は，外来民族によるものでなく，縄文文化の中で生活していた人達であり，その中でも大和政権が出現しない以前に於いて，畿内を中心に，瀬戸内海沿岸・山陰・東海の地に勢力を得たのは，出雲系部族であり，三輪・加茂族が最も勢力を得て，この部族が銅鐸を造り，神を祀ったものと考えられている。（藤森栄一氏銅鐸）

2. 銅鐸研究の現状

銅鐸が何らかの理由によって弥生後期から，古墳初期にかけて土に埋められてより，史上に始めで現われたのは，天智天皇の御代である。近江京で崇福寺建立の際に，土地の整理中発見され，大さわぎになった。（扶桑略記）工人も役人も集まって論じて見ても判らず，吉兆やら不吉の兆やら，国産のものとは露思わず，判らぬままに，朝廷に報告したとあるが，当時の政権の反応には全く記載されていない。変わったことがあれば吉兆として年号を変えることの大好きな時代の事件としては，不思議であり，黙殺されたとすれば何故か，当時の政権の中に銅鐸は何を意味するか判っていた者がいたと解する外はない。なお，銅鐸と云う言葉が始めて現われたのが，このことを記した扶桑略記である。（藤森栄一銅鐸）

藩政時代の学者の間でも研究はあったが，活発に研究発表が行なわれるようになったのは明治以降である。今日に到るまで多くの発表がなされ，論争が行なわれたが，考古学者，歴史学者のすべての人を納得させる定説はないと云える。然し，進歩がなかったと云うことでは勿論なく，新しい研究が続々と発表され進められているのである。銅鐸は記録の上では400～450個位の数に達するが，確実な数として桐原健氏はその研究発表の中で，295個を示されている。（銅鐸集成）

桐原氏の作製された銅鐸の県別出土数の表を示すと次の表の通りである。

県名	数	県名	数	県名	数
石川	1	京都	8	島根	6
福井	4	奈良	13	山口	1
岐阜	5	和歌山	24	香川	14
長野	2	大阪	20	徳島	40
静岡	24	兵庫	28	高知	9
愛知	27	鳥取	7	愛媛	1
三重	12	岡山	13	福岡	1
滋賀	34	広島	1	(栃木)	(1)

栃木県出土は，この表の作製後に発見されたので追加した。この表に見る如く銅鐸は近畿を中心に，四国・東海・山陽・山陰・北陸・遠く福岡及

北関東に及んで分布している。このことは弥生時代に銅鐸文化を持ったとされている出雲系部族か，その影響下の部族がこれらの地方に繁栄していたことと，相当の鋳造部集団が各地にあったことを伺わせる。石川県もまた出雲族の影響下にあったことが想像されるのである。

銅鐸の研究発表は明治以降，考古学雑誌，人類学雑誌・歴史地理の雑誌・或は会誌に続々と発表されており，これらを全て記すことは出来ないので，昭和期に研究発表された著述者の一部を示す。

梅原末治　山崎常盤　後藤守一　森本六爾
喜田貞吉　直良信夫　創光清六　藤森栄一
島田貞彦　大場盤雄　小林行雄　三木文雄
佐原　真　桐原　健

3．銅鐸の使用期と消滅期

銅鐸の出土の状況は，一般的には全く予測しない場所に於いて単独出土することが多い。然し，数個が同一場所から出土する例や、如何にも隠すに適した場所と考えられる所から出ることもある。弥生期の遺物と共に出る例も，数少ないがある。

この同一遺跡から出土した土器類の年代の推定及び，銅鐸の形・文様などより，その使用期を推定された小林行雄氏の研究発表がある。（銅鐸年代論）これを要約すると，

1．銅鐸は弥生式期の遺物である銅剣類と共に出土していること。（奈良・山口の例）
2．銅鐸は，弥生式土器と共通の文様によって飾られているものがあること。（木の葉文・重弧文・複合文）
3．銅鐸は，弥生式遺跡の一部から発見された例，及び弥生式土器と共に出土した例があること。（広島市福田木の宗山）
4．銅鐸は、弥生式土器の使用者によって土鐸として作られた例があること。

などから，銅鐸は弥生中期以前から使用されていたと推定されている。

然しまた，杉原荘介氏の研究「日本農耕文化の生成」によれば，銅鐸を含む日本製鋳造品（青銅器）は，西日本弥生式遺跡の系統的発堀調査の結果から，小林氏の説よりかなり新しく，弥生後期前半以降との考えを述べられている。杉原説の論拠は，北九州圏の銅剣などと違い銅鐸の鋳造原料は，銅鐸個々の重量及び出土数から推定して，大量の地金が必要になる。日本に銅の産出が無かったと考えると当然大陸からの輸入，然もそれは，剣・矛・戈・銭貨などであると考え，大陸から倭国に舶載し得たのは1世紀頃と推定されている。この期間は，中国に於いて秦から後漢に到るまでに秦・前漢・新などの短期政権の交代があり，前代王国の製品の価値が無くなり，倭国えの輸入も容易に行ない得たとされる。これらの舶載青銅器を転用して銅鐸を鋳造した時期を2世期から，3世期，即ち弥生期の後期前半以降とされたのである。これら使用期の私見については，後述する鋳造技術のところで述べたい。

以上の如く銅鐸の使用期については，多少の年代的相違はあっても，弥生時代とする点については学者の間でも異論のないところである。また銅鐸が古墳時代に入ると共に消え去り，土中に埋められたとする点でも同様に異論はない。

然し何故に，埋められたかという点については多くの説がある。これを大別すると，

隠匿説　（敗戦により敵の眼から隠した）。
宝蔵説　（部族の重器として祭事以外に於いて大地に納める）。
破捨説　（大和政権に従属し必要がなくなったとして破して捨てた）。
埋祭説　（大地特に神聖な場所に祭事として埋める）。

に分けられる。このことは後述する使用目的との関連があり，また銅鐸の出土の状況がそれぞれ四説を考えさせる要因を持っているので，一律に考えることは仲々困難なものがある。例えば今日では，予測も出来ない場所であっても，弥生末期の埋めたときは，そこに大樹が繁っていたかも知れない。神が宿り大地に下りる場所として大樹の根本に埋めることも，戦い敗れて一時的に隠す場所の目印として選ばれたかも知れない。大樹もやがて枯れ，腐り果てて，今日の私達には予測出来ない場所に変わったとも考えられる。銅鐸の発見はほとんど偶然であり，素人によってなされるので，埋められていた状況も例外を除いては，正確とは云えない記録が多い。

多くは，丘陵地の中腹，丘陵地の麓，平地と云った平凡な場所で，その埋められた深さも，１米前後か，それ以下のものが多い。これは全く無造作に埋めたとしか考えられない。隠匿するとすれば，もっと深く掘り下げるのが安全である。当時は農耕用の「くわ」のあった時代である。戦いに於いて志気を鼓舞するために持出したとすれば，深く堀る「ゆとり」が無かったかも知れない。とにかく，当時の非常に貴重な銅鐸が，何故このような無造作とも思える埋め方をされたのか全く謎である。

私は隠匿説が最も自然な考え方であると思う。大和地方に新しい勢力が生じ，その勢力の拡大と共に，畿内を中心として勢力を張っていた出雲系部族が，新興勢力との戦いに於いて敗退し，やがて従属してゆく過程に於いて，銅鐸を隠匿したとしたい。抗し難い嵐もやがては去ってゆくことを願い，その時に再び取出して祈ることを考えて，部族の神が宿る大樹，あるいは岩などの下に埋めたと思う。この頃の戦いは嵐の如く起こり，嵐の如く去ってゆく災害的戦いであったように考える。天候の不順によって稲作が不作になれば，生き残るために他の部族を襲い食料を奪うための戦いは繰返されたであろう。強者に対する弱者の部族は，これを災害として，一時的に宝器・食料を隠して逃げたのであろう。然し大和政権による戦いは嵐でなく，地核の変容であった。銅鐸は埋められたまま，やがてその場所も，埋めた事実も忘れ去られたのではなかろうか。

4. 銅鐸の用途

銅鐸を使用した部族は弥生時代の人達であること，その部族は出雲系の部族であることについては定説であるが，藤森栄一氏はその著書「銅鐸」に於いて判り易く説かれている。

銅鐸は出雲系の部族中，特に勢力を張っていた三輪・加茂族の神的性格を持った祭器であった。部族を守り，悪霊を追い，平時に於いて稲の生育を水の神に祈り，豊作を祈願するときに祀られたものであったとされる。

ただこの場合に，「振りならされたもの」か，「置き飾られたもの」かについての定説はない。

然し後述の銅鐸の分類について述べるが，銅鐸の作られた初期は「振り鳴らされ」後期のものは，その形からも振り鳴らす機能性が失なわれ，置き飾られたものと考える。

5. 銅鐸の分類

銅鐸が我国に 300個近く現存することはすでに述べた。この約 300個の銅鐸を，考古学上次の如く分類しその製作年代を推定している。

1．形態及文様による分類

2．機能による分類

形態及文様による分類法は最も多く，研究発表がなされている方法であり，その代表的なものについて記す。

第１表　梅原末治氏

第　1　類	第　2　類	第　3　類
大きさ７～８寸 肉は厚手 帯黒色 上側面の双孔 底縁の凹入共にないもの多し 特殊の横帯文	大きさ1尺5･6寸 鈕は兜型 鐸身は扁平形 第１型流水文 第２袈裟襷文	大型品多し 鈕は小判型 身は円筒形に近く高さは広さに比して大 薄手の鋳放し技巧的に優れる 第１型鈕に３個の渦文飾りの耳あり 第２型飾耳なく底部やや横張る

第２表　三木文雄氏

1 式	横帯特殊文	最古
2 式	横帯流水文	前期
3 式	突線縦横区画内流水文	前期
4 式	厚手の斜格子平帯縦横４区画文	中期
5 式	斜格子平帯縦横帯６区文	中期
6 式	扁平薄手の斜格子平帯縦横４区文	最新
7 式	双耳ある突線縦横平６区画文	最新
8 式	同上耳無	最新

第３表　小林行雄氏

東圏	1.横帯文式鐸圏	中部瀬戸地方
	2.定型式鐸圏	東部瀬戸地方
	3.突線帯式鐸圏Ａ	南海地方
	4.突線帯式鐸圏Ｂ	東海地方

西圏	5.舶載銅利器	北九州地方
	6.国産銅利器	北九州地方
	7.特に平形銅剣	瀬戸内北岸地方

弥生期に於ける我国の文化圏は，北九州を中心とした利器文化，畿内を中心とした銅鐸文化，東北地方の石器文化の三つの文化圏に分けられているが，銅鐸文化圏内に於いても，銅鐸の形態・文様に相違のあることは，いくつかの部族勢力があったこと，その部族に属した鋳物集団が，それぞれ特色のある銅鐸を造っていたことと考えたい。

銅鐸の分類法に於いて久しく主流をなしていた前記・形態・文様による分類法に対し，それとは全く別の角度から銅鐸を追求し，分類する研究を「佐原真」氏が発表された。（世界考古学大系2巻，銅鐸の鋳造）

それは，銅鐸の鈕部の形状の変化を，機能的な面より追求し分類する方法である。即ち初期のものは，吊り下げ振り鳴らすに必要な，強度と形態が与えられて，装飾性は従属的なものであった。鈕部は横に振るに都合のよいように菱形の断面で厚く肉部を持たせてある。事実遺物の中には打痕の見られるものもある。やがて鈕部に鰭がつき，次第に本体にも及んで，鰭による装飾性は銅鐸の形態に重要な位置を占めるようになり，振り鳴らすことが困難となってその機能性は失なわれた。

銅鐸鋳造の末期になると，鈕部の装飾性は，鐸身の3分の1を占める様になり，振り鳴らすことは，強度的にも，形態的にも考えられなくなってゆく過程を分類されたものである。

第4表　佐原　真氏

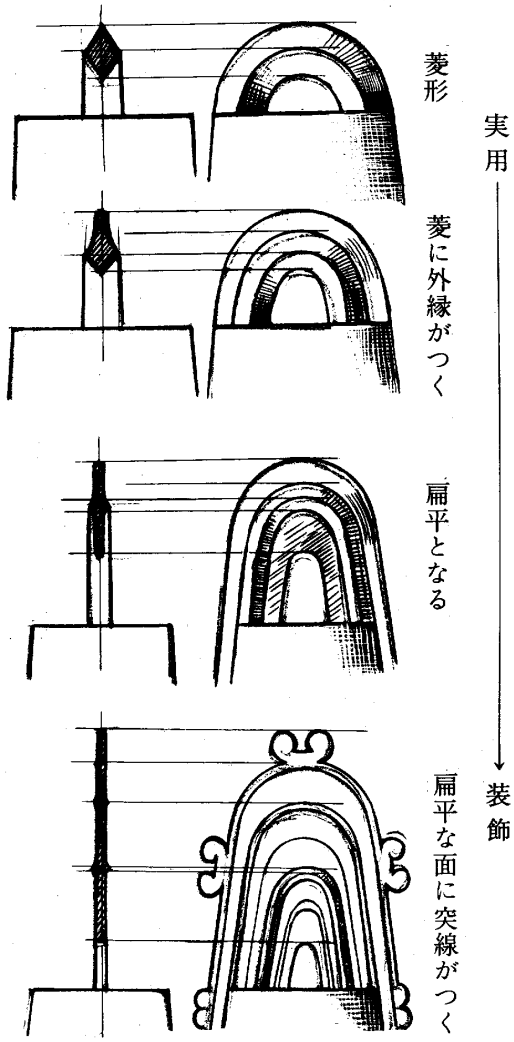
区分	鈕　式	機　　能
1	菱環鈕式	吊って鳴らしたもの
2	外縁付鈕式	吊って鳴らす強度を持たすため外縁がつく
3	扁平鈕式	吊るための強度を持たせる菱鈕が1本の凸線となる
4	突線鈕式	鈕は鐸全長の$\frac{1}{3}$と大きく装飾板的となる

機能と云う考えを考古学の中に取り入れた点は従来にない新しい見解であり，分類法であって，銅鐸の謎を解く上に新しい解決法を示されたと云えよう。然し今日の考古学界では，銅鐸は吊って振り鳴らすものであったか，置き飾られたものであったか定説はない。従ってこの新しい見解（振り鳴らすものと断定した見解）は，新しい見方を示された点に意義はあるが，形態・文様による分類研究に側面から援助するものと解すべきであろう。

銅鐸の造られた初めの頃は，鐸としての性格，吊り振り鳴らす用器としての使用法であったものが，鐸そのものに神的性格を帯びてゆく過程に於いて，威厳を持たせるための装飾面が次第に強化され，鈕部が鰭に変化していったと思う。従って神的性格を鐸自身が持つようになった時は，それは使うものでなく，祈り祀る対照であり，置き飾り，祀るものであったろう。

鈕部の実用的な菱形の厚い肉の断面も，吊り振るための強度の必要が消えたので，次第に形式的になり，装飾の一部として薄細く文様化されたものであろう。

第2図　鈕の変化（佐原式分類）



以上の分類法に従って内灘出土銅鐸の型式，製作期を推定する前に，今少し内灘出土銅鐸をくわしく調べてみよう。

記述の始めに附してある写真を参照されたい。この写真及びその断面図は吉岡康暢氏の報告によるものである。

最初に眼につくのは，鐸身鰭左右及び，鐸裾部の欠損である。これは鋳造不良によるものでなく，明らかに人間の力で欠損せしめた跡である。出土した時に欠かしたものか，埋めた時に欠損せしめたものか，出土時代及状況が不明で断定出来ないが，砂地からの出土とすると，出土時にこのような欠損を生ずることは考え難いので，弥生期に埋蔵したとき，何らかの理由があって，意識的に欠損させて埋めたとも考えられる。銅鐸の埋められた理由と考えられている中に，祭埋説があり，この場合欠損せしめることが祭りの行事と考えられている。

鐸身舞部に3個の小孔があるが，これは鋳造時の湯廻り不良によるものである。

型持跡（中型が作業中動かぬようにしたもの）と考えられる孔も，鐸身上部に2個，鐸身上舞部に左右4個ある。裾部に左右4個の型持状の欠損部がある。これは型持跡であったのか，石掛（けしかけ）跡（外型と内型とを正しく合わせるためのもの）であったのか，断定は出来難いが，私は型持跡と考えたい。

鋳張を生じた跡（鋳型砂の急激な乾燥によって収縮が生じ，鋳型表面に亀裂が出来，この亀裂の間隙に熔湯が流れ込んだ跡）と推定される不規則な斜線，並びに鋳掛けをした跡（湯廻りが悪く大きな孔のあいた部分を，再度金属を熔かして流し込んだ跡）もある。

鐸身の文様である斜格子文も不鮮明な部分があり，この銅鐸を造った鋳型外型は何回か使われたものであると推定される。鐸身の肉厚は相当薄目に精巧に鋳造されているので，熔湯の温度低下によって鮮明に文様が鋳出されなかったことも考えられる。

以上述べた考古学者の分類法に従い，且つ銅鐸の状況から分類し製作年代を推定すると。

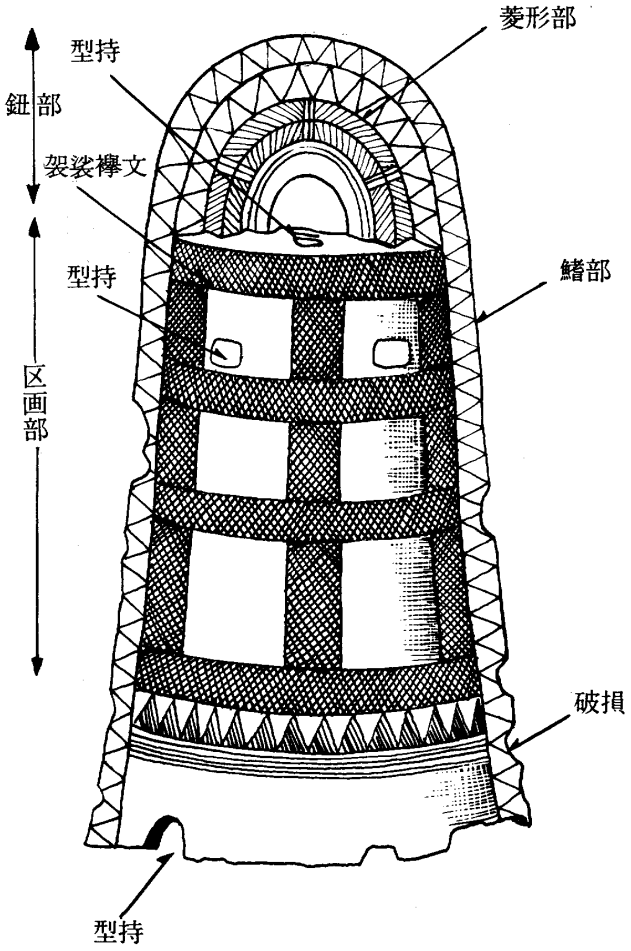
三木文雄氏の分類法によれば，「斜格子平帯縦横帯6区画文」に，

佐原真氏の機能による分類に従えば，「扁平鈕式」に，

梅原末治氏の分類法によれば，「第2類」に相当する。

従って，伝向粟崎出土，の銅鐸は弥生中期後半から後期前半に造られたものと推定される。

第3図　伝向粟崎出土銅鐸図



6.　銅鐸の姿

銅鐸は我国独自の姿，形をした鋳造品で他の諸外国に全くないものである。銅鐸の鋳造技術に関する点は後述するとして，その姿，形はどうして出来たものかと云うことについて述べる。

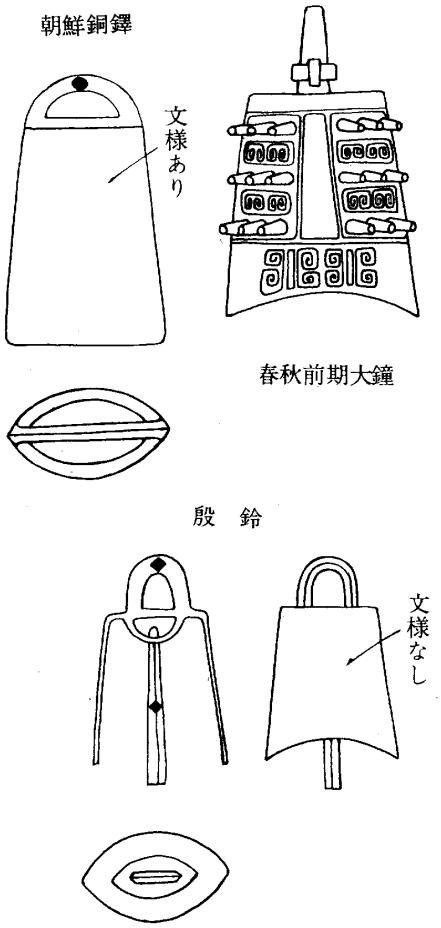
考古学による説に，二つの説がある。一つは大陸の鋳造品を似せて造ったものとする説と，我国独自の文化から誕生したとする説とである。

これらの説のいずれにせよ，これを証明し確定するにたる出土品がある訳ではない。推定であるために説が分かれるのも当然と云える。大陸から

来た形であるとする，梅原氏・大場氏などに於いても，梅原氏は殷の偏鐘，大場氏は朝鮮の馬鈴であるとされる。

次の我国独自の文化から誕生したとする説は，瀬戸内海沿岸に於いて，銅剣などを相当永い期間鋳造していた鋳物集団が，鋳造技術の進歩と共に自然に造り出したもので，大陸の原型ではないとする。

第4図　銅鐸の原形



中国に於ける，殷・周の時代の鋳造品が史上最高と云えるほどに優れていたことは多言を要さぬものがあるが，その一種異様な感を与える器物の伝統は，優れた技術と共に中断して，前漢期以降の鋳造品とは全く性格を異にしている。鋳造技術は，殷・周時代に勝る時代はなかった。然し我国の弥生期に影響を与えた器物の形としては，その伝来の方法が，渡来者による場合，あるいは舶載器物をまねたにせよ，弥生期にそれほど遠くない時代の形，即ち前漢以降の器物の形に源流があると見るべきが，無理のないところではなかろうか。

瀬戸内海沿岸の鋳造集団の中で独自に誕生したとする説も無理があろう。歴史的にも鋳造技術が伝来したばかりと云える中で，技術的に「中型」（中子）の使用法を発明するほどの発達は考えられないし，この技術を完全に生かし得て初めて銅鐸の造形的な姿が生まれて来ることを考えると，大陸の新しい技術と共に銅鐸の姿の源流が，その製法と共に渡来したとする方が無理がない。

我が弥生期に相当する頃の大陸は，秦・前漢新・後漢と国の興亡がはげしく，平和を倭国に求める集団的渡来者の多かったことは充分想像出来る。その中には鋳造技術者も混っていたであろうし，この渡来技術者によって外型のみの鋳造技法に，中子（完全な砂型）製作技法が取り入れられたと考えたい。銅矛などに使用していた粘土を主体とした「中型」では，銅鐸の如き大型器物の製造は考えられず困難であったろう。大陸に於ける国の興亡は，当然朝鮮半島にも及び，半島からの渡来亡命者も多かったことを考えねばならない。半島の出土品の中に我国弥生期初期銅鐸に類似した小型銅鐸石範のあることからも，我国の銅鐸の源流は朝鮮半島にあると推定される。このことについては上代鋳造技法を述べるときに説明したい。然し，我国に鳴器として受入れられたこの原型も，受入れた出雲民族の性格・伝統・社会・信仰によって，日本人的出雲雲族的性格を帯びた姿に変わり，独自なものが誕生したとしたい。

7.　内灘村銅鐸の出土の可能性

この記述の目的は古代鋳造技法の考察にあるのであるが，その動機は身近な地に，古代鋳造品として代表的な製品である銅鐸が出土していることの興味からである。石川県のこの銅鐸は，豪商の所蔵品として世に現われたこと，向粟崎よりの出土説は同家の伝承であること，など考古学者から見ると確証のない心細いもので，吉岡康暢氏も出土の可能性を全く否定出来ないとしても，その確率は希薄であるとされている。調べるにつれて可能性が薄れるとは始めに予想していなかったことで，誠に淋しいことである。

私は考古学について門外漢であるので，考古学

第５表　加賀・能登の弥生期を中心にした遺跡・古墳表

時代		遺跡	出土品	参考事項
先土器		辰口町灯台笹	石器	
縄文期	早期	能登町佐波		殷王朝起る 西周起る－春秋時代－東周
	前期	金沢市小立野 富来町福浦 穴水町小寺 →	尖底土器・貝製装身具・小型石斧・石鏃 石錐	
	中期	宇の気町上山田貝塚 →	滑車型耳飾・飾玉・骨針・うで輪・深鉢・母子像土器	
		金沢市北塚遺跡 →	硬玉製大珠・円形住居跡・埋めカメ炉	
		門前田和田遺跡 →	石棒（男コン）	
		鶴来町白山上野遺跡		
	後期	七尾市北浦 →	石棒・土偶（顔）	
		宇の気町気屋 →	玦状耳飾・ヒスイの飾玉・土偶・垂飾	
		富来町酒見 →	土器・深鉢・注口土器	
	晩期	野々市町御経塚 →	異形石器	
弥生期	前期	金沢市八日市新保遺跡 →	石棒（剣型）・独鈷石（晩期？）	奏王朝起る（ＢＣ221） 前漢王朝起る（Ｂ202） 新起る（ＢＣ８） 後漢中国統一（ＡＤ25） 倭国分れて100余国（前期） 倭の奴後漢に入貢金印を受く（ＡＤ57） 倭王師升後漢に入貢（ＡＤ107） 倭国乱れて主なし（ＡＤ147－188） 中国で三国時代始まる（ＡＤ220） 邪馬台国妊卑弥呼魏に入貢（ＡＤ239） 倭の妊台与西普に入貢（ＡＤ266） 大和朝廷全国統一 任那日本府成立（372頃） 日本高句麗と戦う（391） 倭王東普に入貢（412）
	中期	加賀市柴山村遺跡		
	後期	加賀市猫橋遺跡 田鶴浜町吉田経塚山古墳 河北郡内灘村向粟崎	壺・カメ・高杯・管王・勾玉・ガラス玉（くび飾り） 銅鐸・銅鏃・石庖丁	
古墳期	前期	羽咋市次場遺跡 金沢市田中遺跡Ａ 寺井町和田山古墳群５	倣製内行花文鏡 重圏文鏡・月影式土器（弥生後期→古墳初） 直刀・鏃・手斧・カ子・鋤・剣・矛・鉄の素材塊	
	中期	羽咋市次場遺跡 金沢市田中遺跡Ｂ 金沢市塚崎台地遺跡 鹿島町雨の宮１号墳	大壺 青銅鏡細片・たて穴住居跡	
	後期	略　す		

者の説に従うべきであることは当然であるが，その門外漢を逆に利用し全く自由にその可能性について述べてみたい。

参考のため，能登・加賀の主な遺跡と出土品を第５表に示す。この表から内灘附近には，縄文期から，古墳期にかけて相当の集落・豪族のいたことが推定出来る。

縄文中期に於ける宇の気町上山田貝塚，同後期に於ける宇の気町気屋遺跡，弥生後期の田鶴浜町吉田経塚古墳，古墳前期の羽咋市次場遺跡，金沢市田中遺跡，寺井町和田山古墳群らなどが注目される。

銅鐸が出土したと伝えられる河北潟周辺の遺跡と出土品は第６表に示す。

第6表

場　所	時　代	出　　土　　品
粟崎部落	縄文 中・後期	土器・磨製石斧・石匙・石鏃・石錘
	弥生期	銅鏃5・石庖丁・大根布附近の土中に弥生土器の破片が大量に散布している。壺・カメ・高杯等と推定
大根布部落	古墳後期	須恵器・勾玉・管玉・臼玉・小玉
	時代未詳	鉄器・砥石・環玉・頭蓋骨・古人骨の散乱
安原海岸	弥生期	小貝塚・銅鏃

これらの表によって内灘村附近には縄文期から古墳期にかけて相当の文化があったことが判る。この文化はどこから伝えられたか。大陸からの漂流者もあったと思うが，当時の文化の中心地である，畿内か，出雲かの影響を受けたことは間違いない。おそらく出雲の文化が飛石づたいに及んだものであろう。弥生期に於ける交通は舟が主であり，陸路は困難であったことは云うまでもないが，舟で畿内に達するにしても，越前から陸路と云うことになる。それよりもそのまま舟で進んで出雲に達する方が容易であったことは充分想像出来る。従って越の国全般が出雲族の影響下にあったと考えたい。もっとも弥生期の畿内・瀬戸内等も，出雲族によって支配されていたのであるが，弥生末期から古墳初期にかけて，出雲族は出雲国に圧縮された状態であったと考えられる。

河北潟は稲作農耕に適した湿原の多い地であったことも，地質学によって明らかにされており，同地の新砂丘と下位の旧砂丘の間に，泥炭質黒色土壌がある。

以上のことから内灘附近は，稲作農耕の適地であり，当時の稲作技術に適応した規模の地形を有していたことが想像される。

更に越中・能登え通ずる陸路の「かなめ」的な場所を占めていたことも考えられる。

この地に出雲系部族か，その勢力下の部族が部族としての集団をつくり，出雲の文化を取り入れて栄えたことも考えられる。従って銅鐸を所有するだけの勢力を持つに到ったのではなかろうか。

勿論鋳造地としては考えられない。更に次のことも考慮しなければならない。それは内灘村字大根布部落に祀られている小浜神社についてである。

この神社は松林の中で河北潟に面し，湖上に映る中部山岳の峰々を望んで鎮座している。比較的小さい神社であるが歴史は古く，県内にも少ない延喜式内の社である。祭神は大己貴神・小彦名神・事代主神の三神である。神社の由緒によれば，

「小浜神社は延喜式内(906)の神社にして，加賀国小浜郷加賀郡の総鎮守であるが，創立勧請の年月は詳らかでない。然し当地は三韓に近く，夷敵来襲から守るため，朝廷より神功皇后三韓征伐の時祈願された。出雲国日隅宮の大神の分身同体の神を頂き，当地海辺小浜崎（現在の大崎町）に社殿を建て，日角宮と云い，国家鎮護の神として祀った。その後元正天皇(718)の養老2年6月18日，当社を小浜崎より30町余南方の小浜の松林三転遷社殿を再営した。この地が現在の権現森の旧社地である。又朝廷より神戸を現在の内日角（うちいずみ）の地に，魚取部を現在の外日角（そといずみ）に数十人置かれた。斉衡年中，神託により小彦名神・事代主神を祀り三神併せて小浜神社の祭神となった……」とある。

この由緒書中三韓征伐は別として，大和朝廷が3世期の中頃に朝鮮の任那を支配したこと，その後たびたび出兵して5世期の中頃までに及んだことを考えると，山陰から北陸にかけてその要所（大きな部族のいるところ）に必要な防備の処置をとったであろうことは想像される。

この地に出雲国日隅宮の大神を祀った人々に自分達部族の祖先が出雲族であることを，伝承されていたとすれば，天つ神でなく国つ神の日隅宮の大神を祀ったことは了解される。大和に従服した後も亡び去った祖先の栄光をなつかしみ，その栄光をたたえ祀るに到ったのであろう。私は内灘村に出雲系の神が祀られたことに注目したい。然しその時には銅鐸が埋められた事実は伝承されず，人々から忘れ去られていたのではなかろうか。

内灘の銅鐸はいつ埋められたのであろうか。どの様な時に埋められたのであろうか。先に銅鐸の埋められる理由として考古学上4つのことが推定されていると記したが，内灘の歴史にこれを当ててみると，

隠匿説

埋祭説

の二説が考えられる。

古事記によれば天照大御神の命を受けて，建御雷之男神が天鳥船神と共に，出雲国に到りて，国譲りの交渉に於いて,「汝が心奈何に」と大国主神に迫り，その子・八重言代主命は，「天つ神の御子に立奉ん」と云って自殺されたが，いま一人のの子・建御名方神は承知せずしてあくまで抵抗し，大和軍の追撃をうけて敗退・逃亡しつつ科野国州羽の海の岸辺に於いて「天つ神の御子の命の随に献らむ」と降服したことが書かれている。

建御名方神はどの道を逃げて諏訪湖に達したのか。前述の如く弥生,・古墳期の主要路が海路であったことを考えると，出雲から越の国（越前・加賀・能登・越中・越後）を通り，姫川の上流を登って諏訪湖に達したものと考える。当時姫川の附近には，「ヒスイ」の産地を擁した女王国のあったことと，この「ヒスイ」の原石及加工品が，能登にも，出雲・畿内にもはこばれていたのであるから，この交易路を進めば州羽の海に達し得たであろう。

さてこの建御名方神の逃亡戦に於いて，出雲の影響下・勢力下に内灘附近の部族は，どのような役割を果し運命を辿ったであろうか。砂丘に銅鐸を埋めたとき，その部族の運命を決めた大事が起きたときであろう。

次に埋祭説と内灘銅鐸について考えてみよう。内灘の現在の地形については述べたが，縄文・弥生・古墳にかけての様子は上田三平氏による「石川県史跡名勝調査報告」によれば，当時は森林密生し，鳥獣之に棲み，原始人のこれを捕獲して生活せるを察すべく，現在の海岸線は石器時代のそれより著しく陥没せること明らかなりけりとある。このような時代の我国に於ける祭祀遺跡の例から考えて，原始信仰の対象として自然物を崇拝したことは，古事記その他にも記されている。

例えば山岳・巌石・樹木・湖沼池泉・海岸・島嶼などがある。河北潟は縄文・弥生期からそのほとりに住む人々に多くの恵みを与え，時には非常な災害をもたらしたと考えねばなるまい。

この大湖に対する驚怖と恩恵は原始宗教を考えるとき，当然，神として祀られる要素を持つものである。この大湖をめぐって一帯の深林地帯であったろうが，内灘の砂丘から望むとき，大湖は遠い白雪をいただく山岳が映えて，水神を祀るにふさわしい場所であったろう。

出雲系部族として，この地に農耕生活をいとなんだ人達にも，神聖な神を祀る土地として伝承されていたのではなかろうか。

信仰の対象が水神から，祖先の偉大なる神々に変わったときも，神聖な土地として社が建てられたと考えたい。

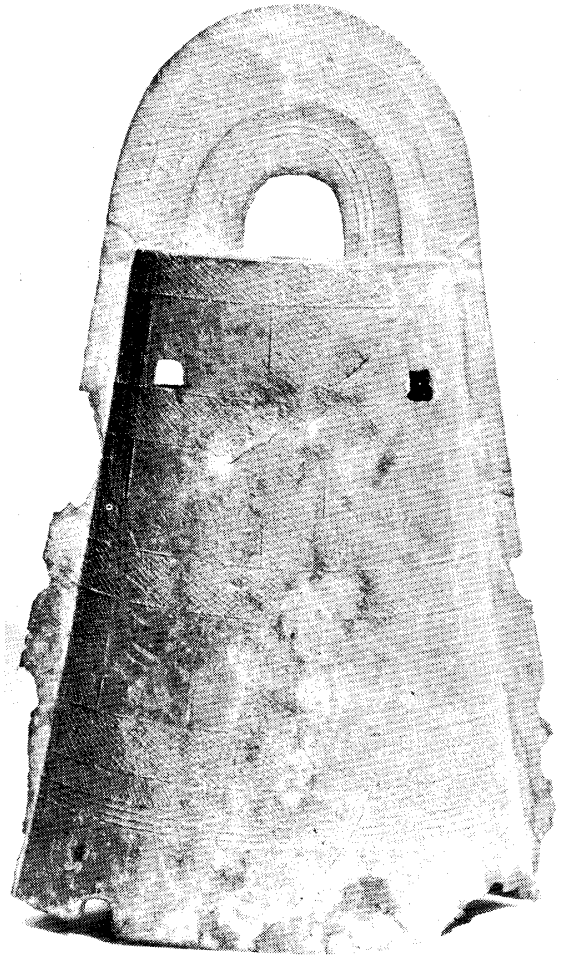
弥生期の出雲系の人達は，水神を祀るとき，銅鐸は振り鳴らされ，又は置き祭られ，やがて祭りが終ったときに再び大地に返し埋められたのではなかろうか。

以上の記述の如く，我国の上代鋳造品として最も優れた銅鐸は，私達の郷里である石川県に於いても出土する可能性が充分にあり，現在鍔氏所蔵の伝向粟崎出土の銅鐸は，河北潟を生活の中心としていた，出雲系の部族が祀り，部族のほこりとしていたものであったと推定したい。天孫系の部族に従服する際にこれを地下に埋蔵したと考えたい。出土の状況が明確でないのは，古い時代の魚民が掘り当てたとすれば当然と云えよう。

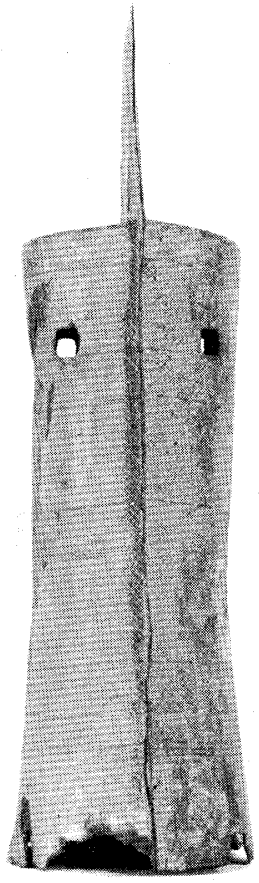
8. おわりに

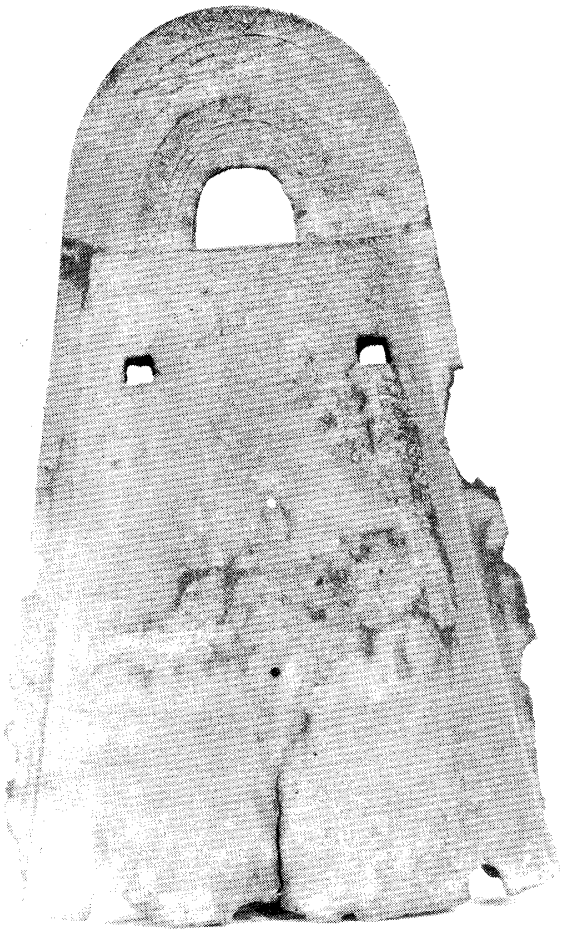
少し長く記述したが，銅鐸と云う弥生期に於ける最も優れた製品についての一般的知識と，伝内灘村向粟崎出土銅鐸の歴史的背景について述べた。このことは古代鋳造技法についての考察記述を容易にするとともに，これから述べる鋳造と云う技術に対し，読者の興味と理解を深めるために必要と思ったからである。

従って銅鐸そのものについて述べるのが目的ではないし，それは専門の考古学者の著書によらねばならないものであるが，鋳造技術面については，多少入る余地があるように考えられるので改めて次回に書くことにする。　　（以下次号）



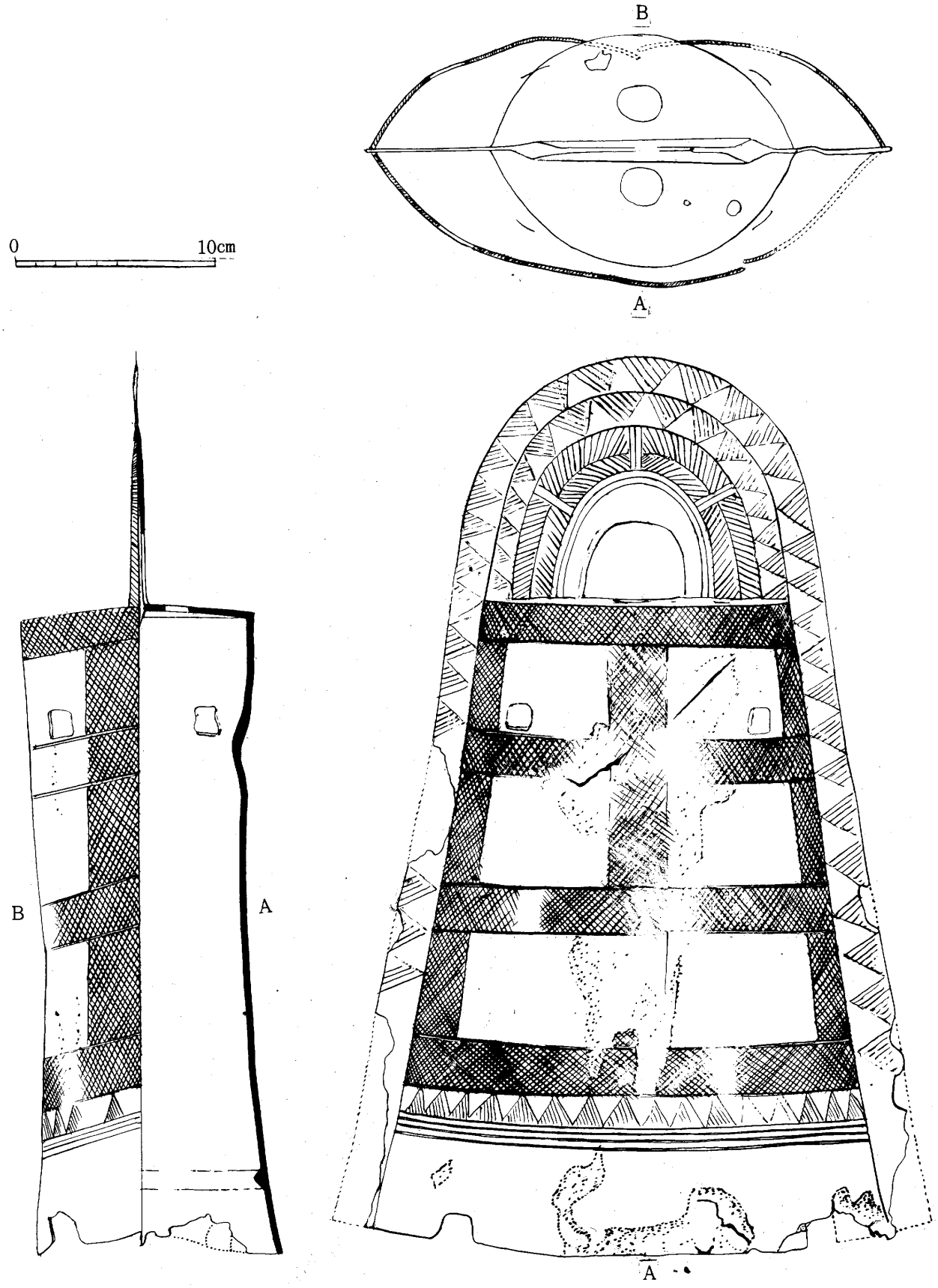
A　面



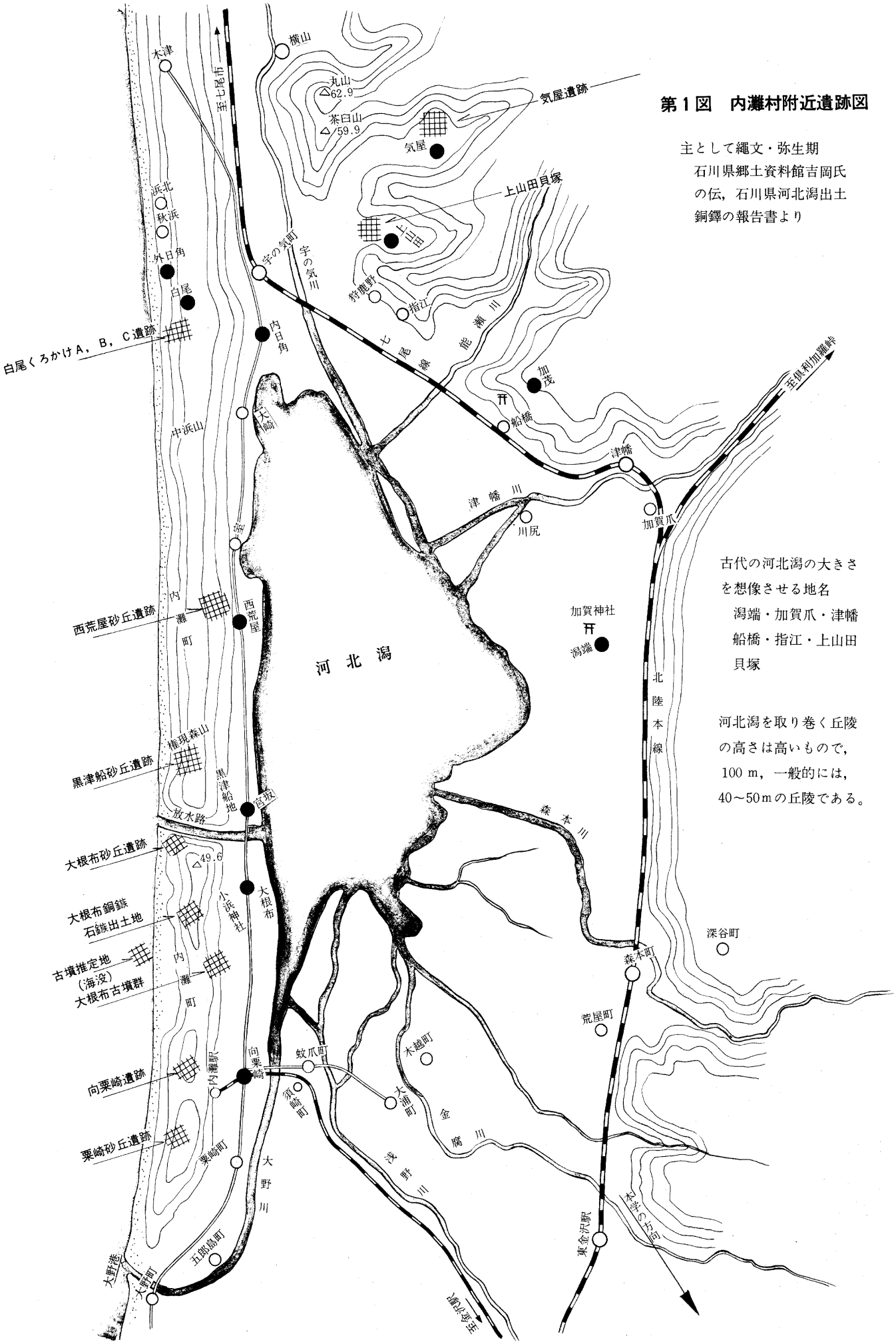


B　面

伝石川県河北潟畔出土銅鐸
（吉岡康暢氏研究報告より）



伝石川県河北潟畔出土鐸実測図
（吉岡康暢氏研究報告より）



第1図　内灘村附近遺跡図

主として縄文・弥生期
石川県郷土資料館吉岡氏
の伝，石川県河北潟出土
銅鐸の報告書より

古代の河北潟の大きさを想像させる地名
潟端・加賀爪・津幡
船橋・指江・上山田
貝塚

河北潟を取り巻く丘陵の高さは高いもので，100 m，一般的には，40～50mの丘陵である。